



第20号

2003.3



社団法人 千葉県緑化推進委員会

第54回 全国植樹祭 開催

5月18日(日)、木更津市のかずさアカデミアパークで、第54回全国植樹祭が開催されます。千葉県で開催されるのは50年ぶりのこと。地球規模でみどりや森林についての関心が高まっている中での開催です。当委員会もはりきっています！

緑化推進委員会の歩みと全国植樹祭

戦後の混乱期、森林が荒廃の一途をたどる中、「荒れた国土に緑の晴れ着を」を合言葉に、緑化運動の推進団体として昭和25年に当委員会は設立され、同年第1回山林大会を開催しました。

みどりづくりの大きな原動力となる緑の羽根募金(現・緑の募金)も翌、昭和26年にスタートしました。

この頃は、おもに山林復興のために植林が盛んに行われていた時期です。

緑化運動の創始期にあたる昭和28年には、第4回全国植樹祭が千葉県富津岬で開催され、これを機に県民参加の緑化運動を次々と展開していくこととなりました。特に郷土のみどりづくり(身近な環境での緑化を推進し、調いある生活環境の創造を目指したもの)を主体に事業を行いました。主なものでは、昭和27年学校植樹、昭和45年緑化運動ポスター原画コンクールの開始、昭和52年ゴルファーの環境緑化促進協力金による公共施設等の環境緑化事業開始、昭和54年当委員会の緑化運動30周年を記念してみどりの少年団を結成、などがあります。

昭和59年、公益法人に改組設立、また特定公益増進法人として承認されました。この節目の時期、昭和60年には第9回育樹祭が富津岬で行われました(ちなみに植樹祭は木を植えることの大切さを伝えるものですが、育樹祭は植えた後の保育の大切さを伝えるものです)。

そして平成に入り、緑化運動には大きな動きが訪れました。

平成7年、緑の羽根募金が「緑の募金による森林整備等の推進に関する法律」により法制化されたのです。森林は木材の生産源という考えから、多種多様な公益的機能を発揮し、すべての人がその恩恵を受けるという視点に変化したことによるもので、国民能参加のみどり(森林)を支えていくことの必要性が認められたものでもありました。そして、これまで緑の羽根募金が果たしてきた役割や、その重要性が高く評価されたものでもありました。

戦後植栽された木々は約50年を経て、立派な森林を形成する時期になりましたが、生活様式の変化、木材価値の低迷、担い手不足等によって、森林の手入れ不足が目立っています。かけがえのない共有の財産をこのまま放っておくことはできないと、ボランティアの



力で森林の整備を行おうという動きが活発になってきています。緑の募金法には、このようなボランティアによるみどりづくりを応援する趣旨も盛り込まれています。県と当委員会はいち早く「みどりのボランティア」推進事業を平成8年から実施しています。

そして今、みどりを取り巻く状況は新たなスタートポイントに立っています。国際的緊急課題とされる地球の温暖化への対策取り組みです。京都議定書の批准を受け、日本のCO₂削減目標6%のうち、3.9%は森林の吸収源対策が担うことになるなど、みどりの持つ公益的機能が極めて重要な位置づけをされています。今や、地球規模でみどりについて考えなければいけないのです。緑化推進委員会も全国一体となってPRほかに努めています。

この重要なスタートポイントで、第54回全国植樹祭が本県で50年ぶりに開催されます。こうして歴史を振り返りますと、当委員会そして緑化推進運動の重要な節目で、植樹祭や育樹祭が千葉県で開催されていることに気づきます。第54回全国植樹祭の開催方針は「人と自然の共生を目標として人類共有のかけがえのないみどりを次代に確実に引き継ぐ」。まさに重要なテーマです。当委員会としてもこの植樹祭開催を契機に、昨年度から関連事業を実施し、多くの人々にみどりの重要性をPRしてきました。今後も時代や多様化する県民のニーズに沿った緑化事業を推進していく所存です。それには何よりも皆様お一人おひとりのみどりづくりへの参加が必要です。今後ともご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

第54回全国植樹祭に関連して 当委員会が行った主な行事

平成13年度国土緑化運動ポスター原画コンクールにおいて、「第54回全国植樹祭広報用ポスター原画の部」を設け、ポスター候補の3作品を選出。この中から松戸市立六実第二小学校5学年（当時）石川未央さんの作品（中央）がポスター原画として採用されました。



植樹祭開催地となる君津地域（木更津市、君津市、富津市、袖ヶ浦市）の全小・中学校に樹木ラベルを配布し、学校における緑のふれあいを推進しました。



緑のエコライフキャンペーンイベント（平成15年3月1日、JR千葉駅前広場）。第54回全国植樹祭千葉県実行委員会との共催で、植樹祭開催を契機としたお一人おひとりのみどりづくりへの参加を呼びかけ、緑化苗木や各種花の種を配布しました。



他にも、第22回千葉県みどりの少年団交流集会を、植樹祭開催地にあたる君津地域で実施したり（平成14年7月29日～30日、君津龜山少年自然の家）、下記のような各種イベントに出展し、PRを行いました。また、植樹祭開催記念「癒しの森づくり」も実施する予定です（平成15年3月23日、市原市・鶴舞県有林）

各種イベント出展におけるPR

- 花と緑のフェスティバル2001
平成13年11月3日、県立幕張海浜公園
- 花と緑のフェスティバル2002
平成14年10月26日、県立青葉の森公園
- エコメッセちば2002（第54回全国植樹祭協賛行事）
平成14年11月1日～2日、JR海浜幕張駅北口広場
- 千座千消フェア2002
平成14年11月10日、千葉市中央公園



第53回千葉県みどりの祭典を、第54回全国植樹祭が行われる会場において、イベントの位置づけとして実施しました（平成14年4月28日、木更津市・かずさDNA研究所芝生広場）。また併催行事としてふるさと森づくりツアーを実施（平成14年4月14日、君津市豊英県有林ほか）。公募参加者ほかにより約700本のヒノキを植樹。また漁業関係者も参加し、森林と海との関わりを認識しました。

大多喜登山ハイキング（平成14年5月26日、大多喜県民の森ほか）。千葉の自然を多くの県民の方々に実感していただき、その大切さをPRしました。



第54回全国植樹祭	
開催テーマ	広げよう 緑の大地 豊かな心
開催日	平成15年5月18日（日）
主催	千葉県・（社）国土緑化推進機構
会場	(1)式典会場：かずさアカデミアパーク（木更津市） (2)清和植樹会場：清和県民の森（君津市）

はじめよう! 緑のエコライフ

緑の循環社会をめざして

「緑のエコライフ」。ちょっと聞きなれない言葉ですが、緑の循環社会を作っていくために、私たち一人ひとりが心掛けたい新しいライフスタイルのことをいいます。毎日の暮らしの中で、省資源・省工

ネルギーを心掛けることと、環境とみどりの関わりを大切にしようという呼びかけです。そこで今回は、皆さんを「緑のエコライフ」の世界へご案内しようと思います。

なぜ、今、緑を大切にしなければいけないの?

「地球の温暖化」という言葉は、もう皆さんご存じですね。そうなのです。今、地球は暖まりすぎてSOSを出しているのです。地球の温度は、まず太陽による日射熱を地表面が吸収します。次に地面から放出された熱を主にCO₂など温室効果を持つガスが吸収し、そこで吸収した熱の一部が再度地球に返されることで、適度な温度に保たれていました。仮に温室効果ガスが無いと、地球の平均気温はマイナス18度くらいになるのですが、今直面しているのは、温室効果ガスの濃度が高くなってしまったために（CO₂は近代的な産業が発達し始めた200年ほど前に比べると、約30%も増えているといわれている）、温室効果が高まり、気温が高くなってしまったことです。

地球の平均気温はこの100年間で0.6度上昇しています。テレビで「南の島が消えてしまう」とか、「ヨーロッパで大洪水」といったニュースがあったのを覚えていませんか？ わずか0.6度の気温の上昇は、南極や北極の氷を少しずつ溶かし、海面を上昇させたり、異常気象の要因になったりするのです。これ以上、温暖化が進むとどんなことになるのでしょうか。

期待される、みどりの役目

そこで、世界中の国が協力して地球温暖化防止に乗り出しました。1997年には「地球温暖化防止京都会議」が開かれ、温室効果ガスの削減を決めました。日本は2008年から2012年までに1990年比で6%削減する約束をしました。温室効果ガスに含まれているのは二酸化炭素、メタン、フロンなどです。特に二酸化炭素が最も温室効果に影響がありますので、あまり二酸化炭素を出さない車を開発するなど、工業社会でも研究が進んでいるところです。そしてもう一方で注目されているのが、森林の役目なのです。なぜなら、森林には二酸化炭素を吸収するという能力があるからです。そこで2001年にモロッコのマラケシュで行われた「COP7」では、森林による二酸化炭素吸収量の算入ルールも定められました。日本の削減目標6%のうち3.9%は森林による吸収源です。森林の役割は、これまでに以上に大きなものになるのです。

森林の恵みの豊かな循環



私たちにもできることはあるの？

「世界会議」というとなんだか遠い世界の話という気がしますが、そんなことはありません。「京都会議」や「COP7」で交わされた約束を守るためには、私たち一人ひとりの暮らしの中での対策も大切なのです。

たとえば、よく言われるような電気の節約。エアコンの設定温度を適当に調整したり、こまめに電灯類を消す。また、自家用車の運行を控えるのもよいかもしれません。また森林ボランティア活動など、CO₂を吸収する健全なみどりづくりに積極的に参加する方法もあります。

木は吸収したCO₂を固定し続けますので、木材製品をたくさん、そして長く使い続けることも効果的です。また、木材を利用することは森林リサイクルのお手伝いをするにもなります。

もっと身近なものでは「緑の募金」がありますね。そう、あの「緑の羽根」です。集まった募金は、学校や公園への植樹、すでにある樹木や指定保存樹木などの保全や育成、苗木の配布、国際緑化や森林整備を行うボランティアの支援、森林浴やみどりの教室の開催など、みどりを守り、育てるために有効に使われているので、地球温暖化防止に協力していることになるのです。



森林は私たちの暮らしのまん中にあります。

私たちは地球という星に住む運命共同体です。本来の自然のサイクルの中で生きるのが望ましいとは思いませんか？木を切ったら植える。植えたら育てる。育ったら切って利用し、また植える。あるいは、雨が降る。森林がその雨を蓄えて、澄んだ水にする。水はやがて海に流れ、海で水は水蒸気になって雲となり、雨が降る。この健康なサイクルは決して失ってはならないものです。森林は私たちの暮らしの真ん中にあるのです。「緑のエコライフ」。私たち一人ひとりが主役のこのライフスタイル、いかがですか？ さっそく実践してみませんか？ 最後に、ちょっと良い文を見つけましたのでご紹介したいと思います。

地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力を保ちつづけることができるでしょう。

「The Sense of Wonder」レイチェル・カーソン著より

NEWS 千葉県で「里山条例」が制定される！

千葉県はこのほど、都道府県レベルでは全国初の「里山条例」を制定しました。

この条例は、人の暮らし周辺の森林、谷津田、水辺等が一体となった里山が、生活様式や農業生産方法などの変化により、荒れた里山が増えていることから、行政と県民等が協働してこれを整備し、教育などの場として活用しながら保全していこうというもので、全国植樹祭開催日に施行されます。

参考図書

「消える森甦る森」めざせ「緑の防人」地球大作戦 宮下正次著
「地球を教え」 ジョナサン・ポリット編
「森林の100不思議」(社)日本林業技術協会編
「ぐりーんもあ」(社)国土緑化推進機構発行

オススメします。この本



「消える森甦る森」
めざせ「緑の防人」地球大作戦
宮下正次著

ほころびはじめた恵みの森、森と海は一体、21世紀の森、といったタイトルからもわかるように、世界の森、日本の森の現状と問題の解決方法などを、わかりやすく述べている。

東洋書店 2,300円(税別)



「地球を教え」
ジョナサン・ポリット編
芹沢高志監訳

どのページも、壊れやすい生態系に暮らす数々の生命のきらめきに満ちている。手遅れになる前に、今こそ行動を！この本の代金の一部は「地球の友インターナショナル」の活動支援などに充てられる。
岩波書店 2,500円(税込)

このコーナーで参考とした上記の本を、それぞれ2名の方にプレゼントします。ハガキに希望する本、住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、(社)千葉県緑化推進委員会「プレゼント」係へご応募ください。また、グリーンえっせんすをどこでご覧になったか、ご意見、ご要望もお書き添えください。あて先はBページ右下参照。締め切りは6月末日(当日消印有効)。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

緑 自 慢

千葉市郊外にある千葉市立越智小学校は、児童数149名。平成元年には534名もの児童がいたものの、現在では千葉市南部24校の中で、一番児童数の少ない小学校となりました。また越智小は、周囲に里山のあるすばらしい環境ながら、団地造成でできた小学校の宿命か、周辺の自然への興味やふるさと意識が希薄でした。

一方、一昨年、越智小は創立20周年を迎えました。そこで記念事業として、野生生物の生態を観察できる空間「ビオトープ」作りをすることにしたのです。池田校長先生は「ビオトープ作りが、越智の自然のすばらしさを知ってもらえるきっかけになる」と考えたのです。「ビオトープ」とは、ギリシャ語を語源とするドイツ語で「野生の生きものが暮らせる場所」という意

味。都市化が進む地域で盛んになっているものです。教務主任の小原先生が自然保護観察員の資格を持っていたことも縁でした。

越智小のビオトープ作りのねらいは①近くにある里山を校庭に再現する②総合的な学習の時間・生活科・理科などの身近な観察・調査・遊びの場となる学習材料として活用する③学校・家庭・地域の三者の連携を深める、の3点でした。かつて校庭にあった岩石園を生かし、いよいよ作業開始。教職員はもちろん、隔週土曜日の午後には、保護者・地域の有志30名ほどと高学年児童と一緒に作業。1~3年生は山野草と土を選び、4年生は遊歩道に木材チップを撒き、5~6年生は落葉樹の植え込み用の穴を掘りました。4月にスタートし8ヶ月、一昨年12月、ついにビオトープは完成しました。市内で5校目のビオトープを持つ小学校になったのです。「イケテル水に棲みたいぞ」。メダカの気持ちになってはしゃぐ男の子。「いろんな虫がいっぱいいるんだよ」と教えてくれる女の子。想像以上の効果がみんなの顔に表れています。

こうした作業を通じて、昨年春には、地域の有志の方々が、自然と歴史環境保護団体「越智メダカの会」を立ち上げました。また、5~6年生はみどりの少年団に入会。さらに現在、大規模な第2ビオトープ作りも進行中。越智小のある土気地区をビオトープの町にしたいとはりきっています。



森の 名手・名人

(社)国土緑化推進機構を中心に、全国の緑化推進委員会では、昨年「もりのくに・にっぽん」運動を展開しています。森林を守り育て、その恵みを活かして、持続的に循環させようというものです。そこで、森林に関わる人とそこから生まれた文化に注目し、全国から「森の名手・名人100人」を選定しました。名手・名人の対象部門(内容)は、森づくり・加工・森の恵み・その他の4つの部門に分けられ、千葉県からは加工部門(炭焼き)に印旛郡印旛村の齊藤清一さん(68歳)、森の恵み部門に夷隅郡大多喜町の君塚吉子さん(65歳)のお二人が選ばれました。そこで、お二人の横顔を紹介したいと思います。



齊藤さんが炭焼きを始めたのは子どもの頃。お父様からノウハウを教わったそうです。齊藤さんが住む印旛村周辺は、江戸時代から「佐倉炭」の産地として知られていました。佐倉炭は、火付きがよく、ほのかな香りが良いと好評でした。そうした伝統もあって、齊藤さんが子どもの時代には、平賀地区だけでも150軒もの炭焼き農家があったそうです。しかし、燃料としての炭の役割が石油や電気にとって代われ、現在では2軒を残すだけとなりました。炭の役割はかなり狭まりましたが、その代わり現在では空気の浄化や産業炭などとしての需要が多くなっているそうです。しかし、燃料としての炭以上に、産業炭作りには高度な技術が必要です。素材が繊細なものになるため、生産過程で割れが入りやすいのです。温度はどうか、いつ釜を封じるか、名人・齊藤さんは、その難しい判断を、煙の色や匂いで行うそうです。

おっとりとした感じの齊藤さんですが、そのスケジュールはかなり多忙です。炭焼き時期といえば、かつては稲作が終わってからの冬場に限られていたのですが、齊藤さんは、田植えの頃を除き年間を通じて作っているそうです。釜は2つ。1つは昭和59年製で、もう1つは60年代製。3日燃やして1週間置く。この作業をひと月に平均3回も行うそうです。1つの釜で焼けるのは炭にして200kg~150kg。使用する木は、閑谷や山の整理などで出るスギ、カシなどの間伐材だそうです。しかも齊藤さんの活動は炭を焼くだけにとどまりません。県内の他の炭焼き生産者とのネットワークを通じ、技術の精進に励み、かつ指導林家として炭焼き技術の普及のため、東奔西走しているのです。

「こうして間伐材を炭にすることで、山はきれいになるし、家庭の空気もきれいになる。炭を焼くメリットは大きいのですよ」と語る齊藤さん。齊藤さんは、今年3月、加工部門の全国代表に選ばれ「森の“開き書き甲子園”」公開フォーラムに出席しました。

企業の中の緑

東葉高速鉄道株式会社
(八千代市)

東葉高速鉄道が開通したのは平成8年のことでした。八千代市の東葉勝田台駅から船橋市の西船橋駅までの全9駅、全長16.2kmを走り、営団地下鉄東西線直通で、都心までわずか45分で行くことができます。沿線には京成バラ園、海老川ジョギングロードといった自然を楽しむスポットをはじめ、日本大学理工学部、薬学部、日大習志野高校といった学校、新しい住宅地域などがあり、たくさんの人々が、通勤・通学や暮らしの足として利用しています。

さて東葉高速鉄道では、地球温暖化防止の有力方法とされる、緑化の推進にも協力されています。それが車両基地の緑化です。12万8,000平方mの車両基地に2万5,000本もの広葉樹を植樹しているのです。さらに、八千代緑が丘駅と八千代中央駅の駅前広場には、地域の皆さんが育てたバラが植えられ、毎年5月から6月には見事な花を咲かせています。

そうした緑化を通じて社会貢献をしたいという気運は、法人としての姿勢だけにはとどまりませんでした。社員として貢献したいという思

いが生まれ、昨年、各セクションを通じ、社員270名の一人ひとりに「緑の羽根・緑の募金」への協力呼びかけが行われたのです。「各セクションでの温度差を感じたことは確かです。それでも協力を呼びかけあうことで、社内のつながりが深まった気がします。それに電車って地球にやさしい乗り物なのです。電車そのものはCO₂を出しませんし、普段、車に乗る方も電車を利用してくださいれば、道路渋滞が緩和したり、排気ガスも減り、結果、温暖化防止につながるわけです」と、総務部の船橋さん。

法人としての緑化への社会的貢献、利用者の皆さんとの地域緑化運動、さらに社員個人としての緑の募金への賛同…。こうした厚みのある緑化への取り組みが、これからますます大きな輪になることを期待したいものです。



まさに、今が旬のタケノコ。君塚さんはその本場、大多喜町のタケノコ生産農家です。0.8haの孟宗竹林から、毎年平均4トンものタケノコを生産しているのです。千葉県での平均でいえば1ha当たりの収穫量は約1.5トンですから、君塚さんの収穫量は平均の3倍もあることになり

ます。タケノコは春になると自然に生えてくるものと思いませんか？生産農家の場合はそうではありません。オフシーズンには山をいたわり、翌年に備え、いろいろな作業をするのです。君塚さんは、夏には古いタケノコを切り、肥料を施し、藁を敷いて地面を暖めます。そうした細かい作業に加え、親竹を立てる時期をきっちり見極めることで、君塚さん自慢の美味しく太ったタケノコがたくさん育つのです。その見極めの助けになるのが、クマガイソウ、キリシマツツジといった指標植物の存在。天気予報以上に、気候の変化を的確に教えてくれるそうです。

君塚さんが名人に選ばれた理由は、もう一つあります。早出しタケノコ（12月中旬から3月上旬までに出るタケノコのこと）の場合、地上に出る部分がほとんどない状態で、その存在を見つけなければならぬのですが、

君塚さんはその発見技能にも優れているのです。親竹の位置関係、枝の張り方から、いつ頃、どこにタケノコが出てくるかわかると言います。この技能は長年の経験の賜物。一朝一夕で得られるものではありません。まさに名人技です。

建設作業以上に体力を必要とするタケノコ作り。30度以上もある傾斜の山を登りながら、タケノコを籠に集めていく。女性にはとても無理と思われるハードな仕事ですが、君塚さんは地元タケノコ生産農家の女性グループのリーダーとしても活躍し、女性の山仕事参画にも先陣を切っています。「タケノコは春の味覚の王者。日和の良い日はもちろん楽しいですが、プロは雨の日も風も日も、もじらないといけません。それが唯一の辛さで、あとはもう、自然相手の仕事ですから幸せです」との弁。今年は、大多喜町でタケノコ掘りに、チャレンジしてみませんか？

森の 名手・名人



春季・緑の募金のお祝い

平成15年度 緑の募金運動
■目標額3,500万円



3月1日から5月31日まで、県内全域で「春季・緑の募金」運動を行っています。募金運動の方法は各市町村で異なりますが、募金は当委員会、各支庁産業課、各市町村窓口などで受け付けております。県民の皆様のご理解と暖かいご支援をお願いいたします。

◎企業・学校など職場単位での募金や、催しでの募金、また募金箱の設置も推進しております。ご協力、ご関心のある方は当委員会までご連絡ください。

平成14年度においては緑の募金法に基づき、春季、秋季の2回を実施し、その募金総額は目標額を上回る35,759,022円に達しました。

お寄せいただいた募金は、みどりあふれるより良い環境づくりを目指し、学校や公園といった公共施設などの緑化や、森林の整備、みどりの重要性の普及啓発、みどりづくりを行うボランティア団体等への支援に役立てられました。また、その一部は世界規模での緑化運動等にも役立てられています。



「私たちの学校にみどりをありがとう」

T o p i c s

平成15年度春季緑の募金が開始した3月1日、JR千葉駅東口前広場において「緑のエコライフキャンペーン」を実施。地球温暖化防止に向けたみどりづくりの重要性をPRし、「まずは家庭からみどりづくり」をテーマに緑化樹木の苗木や花の種子を配布しました。同キャンペーンには千葉瑞穂みどりの少年団やソロボチニスト千葉、緑のボランティアの方々も駆けつけてくださり、苗木の配布や緑の募金の呼びかけにボランティア参加いただきました。

会場は多くの県民の皆様が急ぐ足を止め、「みどりづくりに参加するよ」と緑化苗木を受け取られたり、緑の募金にもご協力くださいました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。



国土緑化運動ポスター原画コンクール 展示会のお知らせ

平成14年度国土緑化運動ポスター原画コンクール入賞作品の展示会を下記のとおり実施します。県内の小・中学生がみどりを見つめ、考え、そして心を込めて描いてくれた作品です。

本年度は過去最高の参加校数（520校）に達し、応募も8,996点と大変多くの作品が寄せられました。当コンクールは平成15年度も実施します。たくさんの作品をお待ちしております。

期間	場 所	展示作品
3/18～4/6	千葉市中央区青葉町977-1 「県立美葉の森公園・公園センター内」	●特別賞●特選 ●入選の計72点
4/23～4/30	千葉市中央区市場町1-1 「千葉県庁19階県民展示コーナー」	●特別賞 ●特選の計36点
6/12～6/29	印西市多々羅田159 「県立北総花の丘公園」	●特別賞●特選 ●入選の計72点
7/15～8/8	柏市柏の葉4-1 「県立柏の葉公園」	●特別賞●特選 ●入選の計72点

*展示作品は上表のようになっています。

*展示期間中の会場休館日は除く。

展示期間等が変更になる場合もありますので、最新の情報は当委員会ホームページでご確認ください。

森林整備ボランティア ネットワークが発足

当委員会では、県内の森林整備ボランティアグループの連絡会にあたる「千葉県森林整備ボランティアネットワーク」を発足し、始動しました。

活動グループ同士の情報交換や連携が気軽に行えることはもちろん、県内の活動グループ情報が集約しますので、ボランティア参加を希望される方も、ご自身に合った活動を検索し易くなります。

当ネットワークへの参加（活動グループの登録）は随時受け付けております。ご関心のある方は当委員会ホームページをご覧ください。またボランティア活動への参加を希望される個人からのご相談も受け付けております。

表紙の絵

表紙の作品は、平成14年度国土緑化運動ポスター原画コンクールにおいて、中学校の部で特別賞「委員会会長賞」を受賞した、柏市立光ヶ丘中学校1学年・大石常貴和さんの作品です。



グリーンえっせんす 第20号

2003年3月31日発行

発行/社 千葉県緑化推進委員会

URL <http://www.c-green.or.jp/>

〒266-0265 柏ヶ浦市長浦拓2号580-148

TEL.0438-60-1521 FAX.0438-60-1522

印刷/凸版印刷(株) TEL.043-245-7071

この広報誌は、古紙配合率100%の再生紙を使用しています。